

# ヒルダ・ミッシェル講座Ⅱ 第3回

## 休むこと ～安息・祭り・遊び～

### (信仰者の観点から)

2014年10月4日

パトリック 山田 益男

#### §1 人の生き方について

今回のテーマ「休むこと」について考える前に、ヒルダ・ミッシェル講座の基本テーマが「キリストに学ぶ人の生き方」でありますので、人の生き方について、そもそも人間とはどのような存在であるのか少し考え、整理しておきたいと存じます。

人は物心が付いた時にはこの世に生を受けていたという存在であり、どのような人生を歩もうかと計画を立てて、自らの意志で生まれてきた者はありません。私たち人間は例外なく、気が付いたら既に人生の第一歩を踏み出していたわけで、その時、周りには親兄弟といった家族、近所の人などがおり、大人より小さな体を持った未熟な自分がその集団の一員として存在しているのだと臆げに自己認識致します。このような状態から、人は成長の過程を始めます。

一方、私たちが存在する環境はどうなっているかといえば、四季折々に変化する地球環境の中にあり、さらに、その地球を取り巻く宇宙が存在します。創世記は語ります。神様はまず天地(大宇宙)を創造され、人間が生きる場となる地球の自然環境を準備された。その地球にはあらゆる被造物が整えられ、最後に神の形に似せて人間を作られ、この天地をはじめとしてあらゆる被造物を管理する者とされ、天地とそこのある被造物を人間にゆだねられたと。「神の形」とは一言でいえば「神の心を知ることのできる者」、すなわち、善悪を考え、他者を愛する心、美しいものを美しい、悲しいことを悲しいと感じる感性を持ち、自らの行動を決める自由意志、そして工夫をしてものを作る能力が備えられた霊なる存在であると小生は理解しております。この世の営みは、神ご自身が整備された環境の中で、神の形に作られた人間が、与えられた理性・感性(良心が含まれる)・自由意志とその器である体を活用してどのような社会を作り、どのように生きてゆくか、深い関心をもって見守る中で進められる、天地創造に始まり世の終わりまで続けられる神様が計画された御国建設の大事業ではないかと小生には思えるのです。

人はといえば神の形に似せて作られているとはいえ、与えられた能力(タレント)は不完全なものであり、真理をすべて見抜き理解できる神のような知性は与えられておりません。また、自由意志なるものが与えられ、決して、神様の意のままに動く操り人形としても作られておらず、完璧とは言えない知性と感性を活用して、自ら考え、自ら感じ取り、何らかの価値判断のもとに自由意志をもって、自らの行動を決めて行動するように作られています。

要するに、神様は人間を「神様の存在を否定することも、神様の導きを拒否することも可能な存在」として、また不完全故に間違いを起こす存在として人間を作られ、そのような不完全性を持った人間に神様は天地の管理を任されたのです。これが人間の実体ではないでしょうか。

この世の営みでは、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、すなわち、その時代時代の状況の中で、そこに生きる人々と歴史を共に歩まれる神が、人との関わりにおいてはただ聖霊を送って人の感性に働きかけるという

形の導きを与えられるだけで、人の目に分かる形で人間社会に直接手を下すことは控えるという鉄則をもって、この世の管理・運営を人間にゆだね、じっと見守られる中で、世の終わりまで続けられる神の国の建設事業なのではないかと小生には思えるのです。何故ならば、神の働きが誰の目にも明らかとなってしまうと、人は神様を認めざるを得ない事態となり、人間に与えた自由意志が機能できなくなってしまうからです。

前述しましたように自分が家族等の集団の一員として存在しているのだと臆げに自己認識することから出発した私たちは、まず、自分が体(肉体)を持った存在であり、日々成長する者であることを認識します。渴けば飲み、空腹となれば食し、病気にかかり体調を崩せば養生し、寒ければ衣をまとい、雨風をしのぐ住まいが必要であると、すなわち、肉体を持った人間は衣食住の必要が満たされないと生きていけないものであることを理解してゆきます。この理解は人間誰しもが共通して持つものであると言えるでしょう。次に、衣食住の必要が満たされれば、人間は満足かといえば、成長の過程で、神の形にかたどられた「神の心を知ることのできる者」、すなわち、善悪を考え、他者を愛する心、美しいものを美しい、悲しいことを悲しいと感じる感性を持った人間は、他の動物たちとは異なり、衣食住が満たされただけでは満たされない、心の渇き・不安を覚えます。特に家族等の集団の一員として愛し愛される存在でないと心の平安が保てないことを自覚いたします。幼児は衣食住が整えられていても、親の愛情が注がれないと、健全な心が育たないことは現代ではよく知られている事象といえます。そのような中で、人は体を持った存在であると共に、理性・感性・感情・意志を持った霊(神の形)なる存在でもあると自分自身を認識することができるかと存じます。

## § 2 私達にとって「休むこと」の意味は何か？

この世で生きる人間は肉と霊とから成る存在であり、そのどちらかを疎かにしても健康を維持することが出来ないことを心に留めて、今日の本題に入りたいと存じます。わたしたち人間にとって「休むこと」は「働くこと」と同様に必須要件のように思われます。休むということは働きを一時停止することであり、働きを止めてしまうこととは異なります。実際、私達の日常生活は「働くこと」と「休むこと」を交互に繰り返すパターンをとっています。

私達が生きている日本の社会では、経済優先の資本主義が浸透しており、人は懸命に「働くこと」によってより多くのものを生産して社会に供給すると共に、人はその生産物を沢山消費することによって、経済が活性化し、豊かな社会が実現すると考えられています。この様に考える社会では「働くこと」がまず重要とされ、「休むこと」はより効率的に働くために必要な副次的なことと考えられがちです。しかし、「働くこと」がいくら重要とされても、休むことなく働き続ければ人は疲れて倒れてしまい、「働くこと」自体ができなくなってしまうから、より効率的に働くために「休むこと」が必要だということになるのでしょう。そこでは、「働くこと」は称賛され、より効率的に働くためでない「休み」は「ずる休み」という言葉があるように後ろめたいことという見方さえあります。

しかし、「休むこと」は働く英気を養うために必要な副次的なことではなく、「休むこと」には「働くこと」と同様に、それ自体に意味を持つものであると小生は考えています。日本では就労時間についての規制がヨーロッパ諸国に比べてルーズであるという傾向がありますし、休暇は定められていてもフルにそれを取得する人はまれという現状があります。経済優先の日本では、人は働きすぎという状態にあることを否定できず、そこに人間として健康のバランスを崩す危険性を抱えていると言えるように思います。特に高度成長期によく起こった「燃え尽き症候群」と

か「過労死」がこれを実証しています。

ヒルダ・ミッシェル講座の前回シリーズの中で「働くこと」について考えました。エデンの園を追われた人間に象徴されるように、人は「額に汗して働くこと」が義務付けられた存在といえ、肉体を持った存在である人間は働くことによって衣食住の必要を満たし、肉体の命を保ちます。しかし、人間は肉なる存在であると共に神の形に似せて作られた霊なる存在でもあるため、霊なる命を養うことも必要であり、神様の業に参加して「働くこと」はその重要な要素となるというお話をいたしました。要するに、「働くこと」は肉なる命にとっても霊なる命にとっても、その養いに必須の要素であるといえると思います。

ところで、働くということは人間にとって大事な要素であるのですが、働きにはその成果が期待されるという面がありますから、よりよい成果を得ようと人は夢中になるという現象を伴います。働くこと自体は勿論よいことなのですが、その中に我を忘れさせるという魔物がいることを私達は見落としてはなりません。「忙」という漢字が心を滅ぼすと表記されることの意味がそこにあります。「休む」ということは、働きを停止することではありますが、働きを停止する時、人は立ち止まり、その時まで夢中になっていたことの意味を確認することができます。休みは目標に向かって視野を狭め夢中になっている自分を、一步引いて広い視野で周りを見る時となりますし、労働で疲れた肉体と心をリラックスさせ、回復させるという効果を奏することは誰しもが実感するところではないでしょうか。

### §3 主イエスが勧める休みの姿

ルカの福音書 9 章 10～11 節の聖書箇所はまさにこの問題について語っております。12 人の弟子たちを伝道旅行に遣わされた主イエスは、帰ってきた弟子たちを迎えたとき、「イエスは彼らを連れてベツサイダという町へひそかに退かれた。」のでした。働きを終えた後、「働く現場から退くこと」が大事であることを主イエスのお言葉が示しております。この退くことについて、マルコの福音書はより分かり易く 6 章 31～33 節で、帰ってきた弟子たちに「さあ、あなた方だけで、人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい。」と言われ、弟子たちは人里離れた場所に、静養のために退くことを促されたことが記されております。

主イエスは、夢中になって働いた後、酷使した体を休めるということは肉体を持った人間の健康を保つために必要不可欠なことであると同時に、一步引いて視野を広げ、自らの働きを振り返り、省察することが人の霊の成長を促し、健康を維持するためにも必要不可欠なことであると言われておられるのではないかと小生は考えます。私たちは目標に向かってひたすら仕事に励んで目的を達成すると、終わった終わったと自己満足に浸って仕事の完了としがちですが、歩みを止めて休息をとり、それまでの励みし方を振り返るときには、今まで見えていなかった周りの状況が見えたり、自分の努力が目的を達成させたのではなく、多くの恵みと支えがあったことに気づかされたりします。無我夢中で没頭しているときは自らの目標のみしか見えていなかったため、周囲に迷惑をかけていたこと等も見えたりすることがあります。「一仕事した後の休み」には、その仕事の仕上げともいえるべき、仕事に伴う大事な学びの時となることを心に刻み、大切な時といたしたいものと存じます。

マタイ福音書 11 章 28 には「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」の言葉があります。この言葉は、この教会の聖堂正面のステンドグラスの下方部にギリシャ語で刻まれている聖句です。歪んだ社会の中で、生き難くされている者、人生に疲れた者に向かって、主イエスは、ご利益信仰のように、

ただわたしを信仰するならば、あなたの苦しみを魔法のように全部取り除いて、幸せに生きられるようにしてあげようとは言っておられません。この聖書箇所ですイエスが言われている「休ませてあげよう」は、疲れた者、重荷を負う者に安楽椅子やベッドを用意して「さあ、重荷をおろしてゆっくり体を休ませるがよい」という意味でもないようです。それは、それに続く言葉が、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」とあることから分かります。軛とは家畜が耕運作業や車輛の牽引などをする場合に頸部に掛ける道具ですから、横になって休むことではなく働くことが促されていると解すべきでしょう。「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」とは、何が大事なのかを主イエスに聴き、苦勞して背負っている重荷の中から、不必要な重荷を下ろし、当人が担わなければならない重荷だけに整理する作業を行うことであり、その上に、主イエスが共にいて励まして下さることにより、背負う荷は負い易い軽いものとなって、貴方の魂が休まることになるといわれていると理解されます。

私たちが背負い込んでいるいろいろな重荷(問題)は、人間社会が作り出したルールに縛られたものであったり、意地やメンツであったり、神様の目からはどうでもよいことが柵となって、人を不自由にし、消耗させていることが少なくありません。一步退いて何が大切であるかを神様に聴く姿勢が疲れた魂を回復させることにつながるということではないでしょうか。実際、私たちは自分では解決できない問題を抱え込んだりして、不必要に悩み苦しんでいることが少なくありません。主イエスのみ言葉によって、躓きから解放され、本来の自分の持ち場を放棄することなく歩むことができたという経験をいたします。

## §4 安息について

日本語で「安息」とは安らかに息をする状態と表記しますが、辞書には「何の煩いもなく、くつろいで休むこと」と説明されていました。安息とは単に、体を休めるのではなく、心に「思い煩い」があってはならないようです。思い煩っている人は、体にも緊張を生じ、自然な呼吸もできない状態となるということを昔の人は知っていたのでしょう。人間の心と体は決して別なものではなく、密接な関係にあるものと理解されます。

聖書には「安息日」のことが記されています。これはユダヤ教の習慣で、神が天地創造において7日目に休まれてこの日を祝福し聖であると宣言したゆえに安息日を覚えて聖なる日とし、労働してはいけないことを教えます。また『申命記』5章では、神がユダヤ人をエジプトの奴隷状態から連れ出して休みを与えたゆえに、安息日を覚えて聖別し、労働してはいけないことを教えます。したがって、ユダヤ教で安息日は、神が天地を創造したことを覚えるとともに、神がユダヤ人の民を救い、神の民としたことを覚える記念日として大事にしてきました。

しかし、この安息日の本来の主旨が忘れられ、「労働してはいけない日」という規定ばかりが独り歩きしている状況をご覧になった主イエスは、この安息日についてマルコ福音書2章27節で「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」と教示しておられます。イエスの弟子たちが安息日に麦の穂を摘んだためにファリサイ派の人たちから咎められ、論争が起きた時の話です。安息日には働かないようにという趣旨は、人は働きを休めて神を思い、神に向き合って自分を取り戻すことが魂の健康を保つために必要であるというものであって、命を脅かされるような緊急事態が起こっても安息日にはその対応をしてはならないという規定ではないということを宣言されたのです。

実際、主イエスは安息日に度々人を癒されたことが聖書に記されております。例えば、シモンの姑の癒し(ルカ 4:38)、手のなえた男の癒し(ルカ 6:6)、18年間かがんだままであった女の癒し(ルカ 13:11-13)、ベテスダの池の病気の男の癒し(ヨハネ 5:2-9)生まれつき盲目の男の癒し(ヨハネ 9:14)、カペナウムの会堂での悪霊につかれた男の癒し(マルコ 1:21-26)など、これらはみな安息日に行われております。主イエスは働きをなされたとはいえ、生活の糧を得るための働きではなく、父なる神様の恵みを人々に届けたのであり、病気を癒された人たちは健康を回復し、安息を得たわけですから、まさに安息日にふさわしい出来事であったと言えると思います。

私たちにとって最大の安息とは何かを考えてみますと、疲れ果てた肉体にはティータイムや安眠が確かに有効ですが、霊の安息、心の安息には何といても聖餐式に与ることではないでしょうか。一週間の生活の中で働いた実りを奉げると共に、不完全な存在である故に犯した罪を主のもとに携えて参じ、赦しを頂き、み言葉を聴き、聖餐の恵みを受けることによって主にある平安が回復されるためであろうかと存じます。

## §5 祭りについて

日本人はお祭り好きだとよく言われます。日本では、そもそも祭(まつり)とは、感謝や祈り、慰霊のために神仏や祖先をまつる行為(儀式)として行われてきましたが、最近では神様の影は薄くなっているような気が致します。学園祭、文化祭、音楽祭などといった当初から神様を意識しない祭も沢山ありますし、○△神社のお祭りといっても、祭りの中心会場が○△神社であるという程度の意識で、神様を祭の中心的存在とする意識は薄くなっているようです。この実態は「祭り」というよりは「遊び」の категорияで考える方が適当かもしれません。祭りのときは仕事をはじめとする日常の生活を休止し、人が集ってそれを催すと言う形態がとられ、神輿を担いだり、山車を勇壮に引き回したり、大勢の人が一緒になって汗を流し、声を合わせたりエネルギーを発散させて爽快さを満喫しているようです。汗を流した後の一杯がまた楽しいのでしょう。

チームで一仕事を終えた時には「打ち上げ」と称して宴会をして労をねぎらう習慣が今日の日本社会には定着していますが、これもお祭りの一つといえるかと思えます。お祭り騒ぎという言葉もあるように、祭の時には日常の規律が緩められ、羽目を外してばか騒ぎをすることも大目に見られると言った風習もあるようです。神様を抜きにしても、お祭りには、日常を離れ、日頃の憂さをパット晴らして、みんなで楽しむ、大人も子供に帰ったような気持ちになれる。それによって気分転換ができるという効果があると思います。

旧約聖書にはユダヤ教の祭が記されています。仮庵祭(スコット)、過越祭(ペサハ)と七週の祭り(シャブオット)はユダヤ教三大祭です。それぞれイスラエルの故事にちなんだ祭で、仮庵祭はユダヤ人の祖先がエジプト脱出のとき荒野で天幕に住んでいましたが、祭りの際は仮設の家(仮庵)を建てて住んだことにちなむもの、過越祭は死の使いが羊の血が塗られたユダヤの家を過ぎ越した記事にならうもの、そして七週の祭りはシナイ山で十戒が与えられた故事にならうものなようです。主イエスはこれらの祭にどのような考えを持たれ、どのような参加をされていたかはよく分かりませんが、受難の時は過ぎ越しの祭に合わせてエルサレムで迎えておられます。最後の晩餐は小羊を屠り種入れぬパンで過ぎ越しの食事をなされておられることから、このユダヤ教の習慣を守っておられたものと推察されます。

キリスト教のお祭りといえば、クリスマスとイースターそして聖霊降臨日が代表的なものといえるでしょう。これらは

主イエスが制定された祭ではなく、後のキリスト教会が立ててものです。主の復活を記念するイースターと主日がまず、制定され、守られてきたということです。原始キリスト教団はユダヤ教から異端視され、目の敵にされていましたし、ユダヤ戦争後はローマ帝国から反体制勢力であるユダヤ教の一派とみなされていましたから、地下組織とならざるを得ませんでした。そんな中でも命を懸けてキリスト者はイースターと主日を守り続けたということです。それは、主イエスの十字架と復活の出来事はキリスト教信仰の原点であることを確信していたからであります。カナの婚宴の時には「わたしの時はまだ来ていません。」と、そして、ゲッセマネの園では「時が来た。」といわれたとおり、主イエスご自身、受難の時を「わたしの時」として強く意識されておられました。それはご自身が父なる神様から遣わされた主たる使命が、神から遠く離れた存在となってしまった人間と神との橋渡しとなるために「神の小羊」として犠牲となる役割を果たすことにあると熟知しておられたためと存じます。

十字架による死と復活の出来事を通して、弟子たちは主イエスのメシアとしての意味を初めて理解させられたのです。父なる神につながれた人にとって、肉体の死は人生の終わり、自らの存在の消滅ではないことを主イエスご自身が身をもって明らかにされたのでした。その時から弟子たちは権力者の迫害を恐れて逃げ回る弱虫から死をも恐れぬ信仰者へと変えられたのでした。キリスト教信仰の原点はここにあると確信し、迫害時代においてもイースターの礼拝を命がけで守っていたのです。今私たちは喜びの祭としてイースターの礼拝と祝会をしておりますが、当初はカタコンベなどでひそやかに行われた厳粛な礼拝だけであったと推察されます。しかし、大きな喜びに溢れた礼拝であったことは想像に難くありません。クリスマスは禁教令が解かれ、ローマの国教と認知されてから、祝われるようになったようです。ローマの太陽神の祝日 12 月 25 日に合わせて祝われるようになりましたが、これは多分、教会の指導部が、信徒たちが太陽神の祭にうつつを抜かさないと考え、同日に主イエスの降誕を祝うようにしたものでありましょう。聖霊降臨日の方は復活祭から 50 日目、過越祭の翌日から数える七週の祭りの日に聖霊が降ったと使徒言行録は伝えています。この祭りは当初は復活祭の一環として守られていたようですが、その後、教会暦の中で別箇の祝日として祝われるようになったそうです。

クリスマスはキリストを迎える日、イースターは主イエスが復活された日、聖霊降臨日は昇天された主イエスに代わって、神のみ言葉を人々に伝える任を担うものとして聖霊が下された日として、教会の祭りは、いずれも神様への感謝の気持ちをもって礼拝がなされます。祝会においても神様を中心に迎えてその事柄を共に祝い、喜びと楽しみを共有すべきものです。神様を横に飾ってお正月を祝うような単なる年中行事とならないように、私たちは心しなければならぬと存じます。

## §6 遊びについて

この「遊び」ですが本講座の計画の段階では、「遊び」ではなく「趣味」という言葉を用いていましたが、「趣味」というよりはより広く一般的である「遊び」という概念でこの問題を考えとした方が適当ではないかということで、「遊び」という用語に変えた経緯がございます。

人間にとって遊びにはどんな意味があり、効用があるのでしょうか。まず、幼児期における遊びは、発達過程における重要な要素となっています。おもちゃを使って手先の動きや体の使い方を会得しますし、遊びを通して思考力を鍛えたり、仲間と仲良くしていくにはルールを守る必要があることもこれを通して楽しく学びます。子供に限

らず、人間にとって遊ぶことは、理屈抜きに楽しいものです。ですから、適度に疲れたり、落ち込んだりしている時には、遊ぶことによって気分が転換され、元気を回復させる効果が認められます。しかし、遊ぶことの効用は良いことばかりではなく、勉強したり、仕事をするよりも断然楽しいですから、それをしないでずっと遊んでいたいという誘惑の種にもなり、怠け者を造る要素にもなります。実際、学生時代に遊びすぎてまじめに勉強しなかったこととか、やらなければならないことがあるのに、飲みにいこうと誘われてつい付き合ってしまうなど、私にも身に覚えのあることです。

機械用語にも「遊び」というものがあり、英語ではこれを **clearance** といいます。機械的可動部における部材間の隙間をそう呼ぶのですが、それは相対移動する際に互いの摩擦を軽減して動きを許容する効果を奏します。しかし、その隙間も広すぎると、両部材の組み合わせが外れて機械としての機能を失ってしまいます。確かに「遊び」には機械機構としてだけでなく、人のチームワークにおいても動きをぎくしゃくさせず、消耗も軽くてスムーズに行わせるという効果があるように思います。

趣味という、ジャンルで遊びを考えてみますと、スポーツであるとか、絵画、音楽、文学など文芸的な事柄が関係してくるように思えます。人間は原始時代から洞窟の壁に動物の絵を描いたりしていたようですし、土器の表面にも絵や模様を描いています。実利的な意味があつてというよりは「遊び心」からかと思われれます。人には本来的に「遊び心」が備えられていると考えられます。音楽にしても、早い時期から宗教儀式やお祭りの際等に採用されていたようです。これらの文芸は奥が深まると芸術の域に達し、人の心を豊かにしてくれるものとなります。

スポーツは体を使って汗を流します。人間は肉と霊とから成る存在ではありますが、体の事情が優先されることが多いようです。体のことで目いっぱい状態にあるとき人の頭は他のことを考えません。この様な人の特性によって、スポーツに夢中になって体を動かしている時、人の思い煩いは頭から消えていきます。これが、人のリフレッシュにつながるのだと言えましょう。スポーツに限らず、祭りであっても他の遊びであっても、人がそれに夢中になるということは、他のことを忘れるという現象を伴いますから、日常生活において抱え悩んでいた事柄を一時頭から外し、その後、改めて考え直す機会ともなります。座禅で無心となることに通じるものではないかと思えます。いい汗をかいてすっきりして日常に帰る。これがスポーツの効用であろうかと存じます。

私も今までに釣りや、お茶といった趣味を楽しんでまいりました。釣りは自然界の中に身を置くことを楽しみ、魚と駆け引きをして釣り上げることを楽しむのが主眼ですが、捕った魚で一杯やっけて楽しむというおまけもあります。魚を釣り上げるという作業は漁師の仕事と基本的に同じですが、釣り上げた魚を売って生業とするわけではなく、趣味として楽しむものです。坊主(一匹も釣れない)の時は別として、理屈抜きに楽しく、ストレスなどはいっぺんに解消され、元気になります。漁師が大漁を喜ぶ気持ちとは別のものです。

茶道は趣味として多様な要素を含むものです。基本的に茶をもてなす亭主(主人)と茶をもてなされる客という立場の人がおり、お茶を介した両者間の心の交流というのが重要な要素となっています。また、焼き物、漆器類、竹細工、といった用いる道具を芸術作品として共に鑑賞して楽しむ要素もあり、掛け軸、お花など、限られた道具立てで簡素な茶室にその茶会の彩を添えることも要素の一つです。要は、招いた客をどのようにして喜ばせようかとの亭主の心配りと、亭主の心入れを感謝しつつ、それを無為にすることの無いようにくみ取る客の真摯な態度が茶席の神髄です。これは、日常茶飯事という言葉があるように、お茶を飲み、食事を共にするという日常生活の形態の中で社会における人間関係の在り方、互いの心配り(愛)をパターン化したものであるといえます。こうなりま

すと、人間性を育むものともなり、趣味も単なる楽しみの域を超えるものといえるでしょう。

ところで、私達の主イエスはどのように遊ばれたのでしょうか。幼児期は勿論、成人された後も、きっと遊び心をお持ちであったと推察いたしますが、聖書の記述にそれを見つけることは難しいようです。しかし、マタイ福音書 11:19 やルカ福音書 7:34 には「人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ。』と言う。」との記述がみられます。ここから、主イエスが、世の中から除け者とされていた徴税人や罪人たちとの会食を楽しんでいたことが推察できます。その会食は単に飲み食いを楽しむというのではなく、世の中から疎外されている者に寄り添い、『人の非難にめげることなく、生きなさい。自分が罪人であることを自覚している君たちを父なる神様はきっと受け止めてくださる。これからは、受け入れて頂いた者にふさわしい生き方をするように。』と励まされたのではないのでしょうか。このようなメッセージを、飲食を共にすることにより、相手との心の距離を縮めて発信されたものと推察いたします。

私も酒好きの食いしん坊ですから、気の合った仲間との会食は大好きです。しかし、その席にいつも主イエスをお招きしているかという、すっかり忘れて単に飲み食いを楽しんでいることが多いのです。そのため、度々酒の上での失敗を重ねてきました。文語聖書のエフェソ書第 5 章 18 節の言葉「酒に酔うな。放蕩はそのうちにあり。」は耳に痛い言葉です。

## § 7 休むことのまとめ

今日私達は「休むこと」ー安息・祭り・遊びーに焦点を当て、キリスト者であるならば、どのように休めばよいのか、主イエスはどのように休むことを私たちに望んでおられるのかいうことを考えてみました。

休むということは、人が人としてなすべき勤め(仕事)を果たしてゆくうえで、その作業の途中で間歇的に取り入れなければならない必須要素であると言えます。

人は働きをより効率的にするためにだけ休むのではなく、休むという行為の中で、人は生きるための学習もしますし、教養を深め人間性を豊かにもさせられますから、「休む」という行為自体に価値があるものといえます。しかし、度を過ぎた安息は怠惰に通じ、神様を横に追いやったお祭りは人迷惑なばか騒ぎとなり、遊びは理屈抜きに楽しいものでありますから、いつでも遊んでいたいという誘惑の種となり、人を狂わせる元凶ともなります。ですから、「働くこと」と「休むこと」は生活の中でバランスをとっていかなければならないことといえるでしょう。

人間は肉体と霊とから成るものでありますから、私たちは、休むことによって心も体も健やかに保つことが重要であります。その様な霊肉共に健やかな状態の内に生活することによって、私たちははじめて天の父から与えられた各自の業をなすことが可能となるものと存じます。